JSCA賞（第28回作品賞）
「市立吹田サッカースタジアム」　奥出　久人

本建物は、ガンバ大阪の新しいホームとなる40,000人収容のサッカー専用スタジアムスタジアムである。すべての観客席を覆うロの字形状の屋根には、トラスを長辺・短辺・45°の3方向に架ける「3Dトラス構造」を適用した。この架構方式によって、トラススパンは井桁方式に比べて半分の約100mになり、構造合理性の高い屋根架構を実現した。また、屋根を免震構造とすることで、屋根鉄骨量が大幅に削減され、懸垂物の落下に対する安全性も向上させた。スタンド構造には、PRC梁とFc200N/mm²の超高強度コンクリート柱を適用することで、開放的な建築空間を創造した。コンコース部分は、10.75mスパン梁にPRC梁を適用し、RC梁とした場合に比べて柱を1列少なくし、広々としたコンコースを実現した。施工面においては、基礎構造を含む構造体の大部分にPCa工法を適用し、高い生産性と短工期の実現に貢献した。

JSCA賞（第28回奨励賞）
「日本橋ダイヤビルディング」　浜田　勇気

日本橋ダイヤビルディングは、中間層免震の地上18階建のオフィスビルである。既存建物（昭和5年竣工）は、「東京都選定歴史的建造物」に選定（2007年3月）されており、本計画の開発手法として特定街区により容積割増を受けていることから、「既存建物と超高層建物の共存、共生」をテーマとしている。建物高さ90m未満という制限下で必要延床面積を確保するために、新築超高層部分での1フロア当りの面積を拡大する必要があったが、一方で、「既存建物を広範囲に保存すること」も必須条件であり、かつ6階建の既存建物架構に超高層部分を支持させることはできない。そこで本建物の上部架構には、屋上に配置されたハットトラスと免震直上階に配置されたアンダートラスから構成される「オーバーハング架構」を採用し、上述の課題を解決した。また下部構造においては、「既存部と新築部を構造的に一体化する」ことでEXP.Jを必要としない建物としている。「オーバーハング架構」を有する上部構造と「既存部と新築部を構造的に一体化する」下部構造を「中間層免震」にて連結することにより、上部下部共に地震時の応力負担を低減し、安心・安全な構造計画を無理なく成立させている。本建物は、上述した様々な課題を、中間層免震をはじめとした構造技術で解決した。

JSCA賞（第28回新人賞）
「G.Itoya」　川口　恵

本建物は銀座の中央通りに面する文房具店「銀座・伊東屋」の建替計画である。旧ビルの象徴であったステンレスのファサードを内部に折り込み、ビルの内側を通じて背面の通りまで貫通させることで、銀座のまちとつながる拡張された「ガレリア（みち）」として再構築した。建物高さ56m、間口8m、奥行き38m、塔状比7の細長の平面形状とスレンダーな立面形状の建物を成立させるため、短辺方向は1スパンラーメン構造に加えて建物中央部に地下階から最上階まで全層を貫通する剛強な「通し壁柱」を設けた。通し壁柱は、大地震時に変形や応力を上下層へ分配し、層崩壊を回避する役割を持ち、柱せい2500mmのビルトH形鋼とした。通し壁柱脚部には、壁柱への応力集中を緩和するためのゴム支承を設置し、水平方向の拘束を緩めた。両妻面にはオイルダンパーを配し制振構造として安全性を高めているが、銀座中央通り側妻面のオイルダンパーは透明感の高いファサードに溶け込む細径のブレースダンパー（φ267.4mm）を2層にわたり配置することで、ファサードデザインとの融合を図った。ブレース端部接合部は、建築主のスケッチを元に鉄骨の削り出しにより製作した。通し壁柱を有効に利用した制振構造とすることでロバスト性を有する安全安心なペンシルビルを実現できた。

JSCA賞（第28回新人賞）
「TOYAMAキラリ」　斎藤　慶太

TOYAMAキラリは、図書館・ガラス美術館・事務所用途からなる複合施設の建物である。各階で図書館・美術館互いの用途の雰囲気を感じさせるため、建物中央部付近に吹き抜けがあり、その吹き抜けが各階で平面的に形状を変えながら、断面的に斜めに横断していくことが本建物の特徴である。空間を実現させるため、構造的には、建物中央部付近にフィーレンディールと斜材からなる架構を導入し、その両サイドには、CFT柱を配し、架構が運んできた荷重を基礎まで伝達させている。架構を形成した後、吹き抜け周辺部に大梁、斜め梁、片持ち梁、束材・吊材を配置し床を構築した。地震に対しては、柱・梁のフレームのみで保有水平耐力を確保した後、座屈拘束ブレースやオイルダンパーを配置し、耐震性能を高めている。いくつの面にもおいて、複雑な建物であったが、設計者、施工者が一体となって協同し実現した建物であると考えている。